

# 07

## 統計地図で見るインド 経済成長と深刻化する地域格差

インドの国勢調査は、1872年、イギリス植民地の時代に始まりました。以来、10年に1回のペースで大規模な調査が行われています。直近の調査(2011年調査、2014年10月発表)では、インドの総人口は12億1057万人でした。政府が運営している公式サイト(<http://censusindia.gov.in/>)は、各州ごとの数値を合算した統計が多く、私たちがよく目にする「都道府県別(州別)」にまとめた統計が少ないので、州別の比較をしたければ、各州の数値をつなぎ合わせるしかありません。お国柄なのか官僚気質なのかわかりませんが、とにかく公式統計から主題図を作りにくい、地理関係者泣かせの国なのです。同じ悩みはインドの研究者やインド経済を分析するエコノミストも抱えているようで、インターネット上にはインドの経済統計を使った「解説サイト」がたくさんあります。

図1は、インドの各州別の平均所得の地図です。出典は、「Maps of India.com」(<http://www.mapsofindia.com/census/>)というサイトで、インドの国勢調査から作成した地図画像を販売していますが、サンプル画像とデータは無償で見ることができます。

2004～2005年の時点で、インド全体の1人あたりの年間平均所得は約362ドル(2万4143ルピー)でした。最も豊かだったのは西南部のゴア州の1154ドルで、この州以外は直轄市を除いて1000ドルを超える州はありません。逆に最も低かったのがバングラディッシュの西隣、ヒンドスタン平原にあるビハール州の118ドルで、西隣のウッタール・プラデシュ州(194ドル)とあわせて、インドの北部に最貧地域が連なっています。

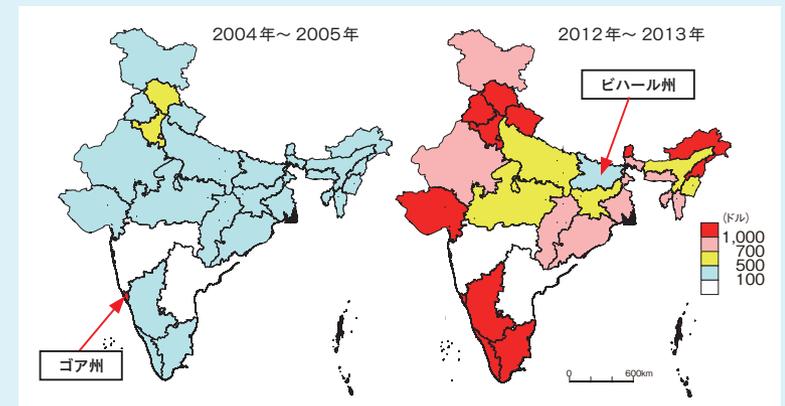


図1 州別1人あたり平均所得の推移 (Maps of India.com “India Census”より)

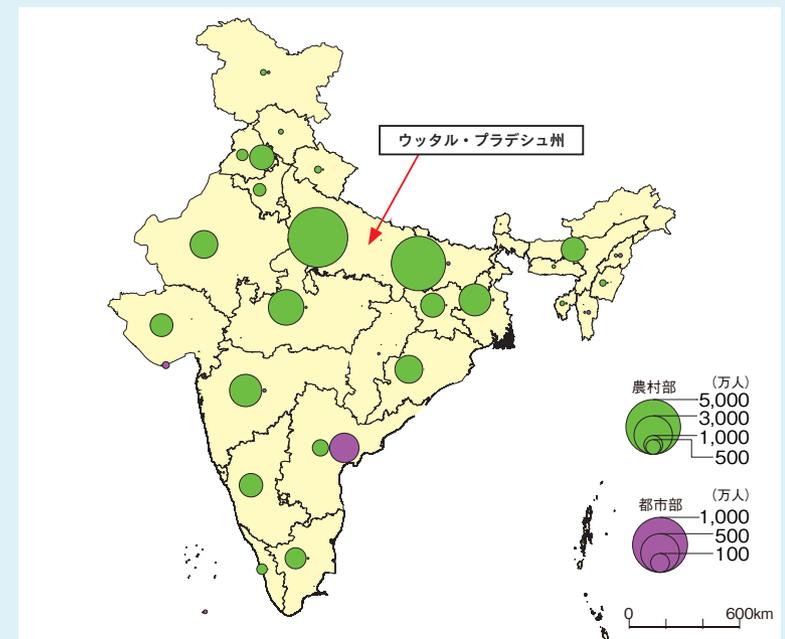


図2 インドの州別貧困人口 (インド中央銀行 “Number and Percent of Population Below Poverty Line”より作成)

## 08

## 聖地・メッカの入場制限 巡礼者増と安全の両立に向けて

イスラム教徒の義務として1日に5回祈りをささげる土地であるメッカ。信徒にとっては一生に一度は訪れたい聖地巡礼を、アラビア語では「ハジ(Hajj)」と言います。サウジアラビア政府によると、2016年は年間189万2909人が訪れました。そのうちの約70%にあたる132万5372人がサウジアラビア国外からの来訪者でした。

歴史の中の「巡礼」と言えば、砂漠を何か月も旅するキャラバンで、交易を兼ねた冒険商人たちによる命がけの旅というイメージがありますが、現代では外国からの来訪者は94%が飛行機を使って入国しています。また、巡礼者の45.4%が女性でした。イスラム教徒が多い国の中には、人口が増加し、なおかつ急激な経済発展を遂げている国もあり、聖地巡礼のニーズは高まるばかりですが、受け入れ側のサウジアラビアでは、巡礼者の入国を大幅に制限する動きがあり、物議を醸しています。

図1・2は、メッカへの巡礼者を出発国別にまとめた地図です。2011年と2016年を比較しました。2011年には年間1万人以上の巡礼者を送り込む国が相次ぎました。最も多かったのはエジプトで26万人に達しました。以下、パキスタン(約12万5000人)、インド(約5万6000人)、イエメン(約4万1000人)、バングラデシュ(約3万3000人)、スーダン(約3万1000人)、シリア(約2万7000人)、インドネシア(約1万8000人)と続きます。しかし、2016年には、パキスタンとエジプト以外はすべて1万人を下回りました。

図3は、国別の巡礼者数の変化をグラフにしたものです。外国からの巡礼者は2012年にピークに達しますが、2013年以後急激に減少し、回復の兆し

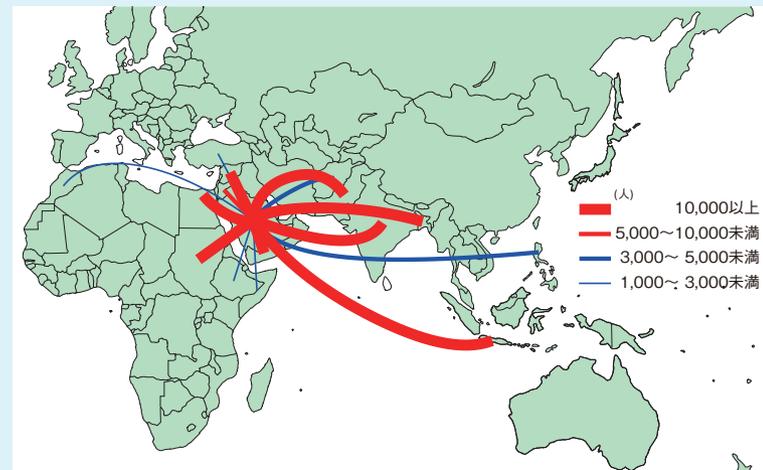


図1 メッカに渡航した巡礼者数 [2011年(出発国別)]

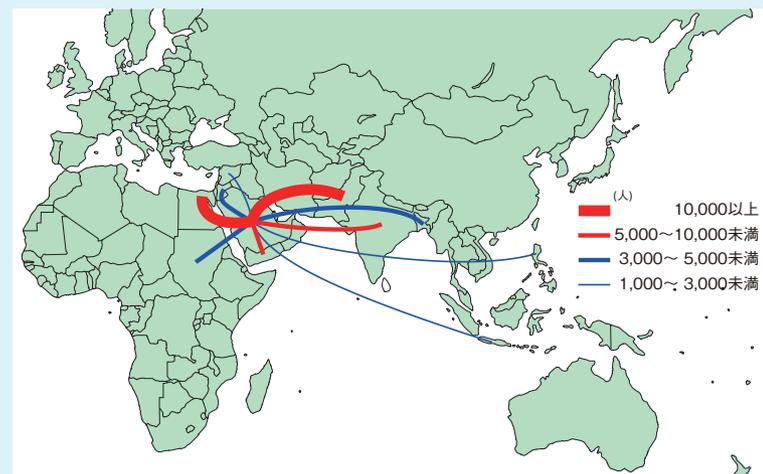


図2 メッカに渡航した巡礼者数 [2016年(出発国別)]

〈サウジアラビア王国統計庁“Statistics of Hajj”より作成〉

は見えません。2016年の巡礼者はエジプトから3万4996人、パキスタンから1万4589人、インドから8446人と、どの国も大幅に減りました。巡礼者が激減した背景には、押し寄せる巡礼者に対応しきれなくなったサウジアラビア政府による受け入れ制限があります。観光地でも観光客の集中による事故や周辺環境の悪化が問題視されますが、決して大きくない街に限られた期間(ラマダン月など)に巡礼者が集中するメッカでは問題はより深刻です。例えば、2015年9月24日に起きた巡礼者による将棋倒し事故では769人が亡くなりました(サウジアラビア政府の発表値。出身国の政府が発表した死者数を合計すると、2181人になる)。事故のわずか9日前の9月11日には、カーバ神殿の前のモスクの改修工事をしていたクレーンが倒れて107人が死亡する事故が起きたばかりでした。こうした事故だけでなく、巡礼者の病気(特に高齢の巡礼者の体調不良や、熱中症による死亡)や盗難、行方不明などのトラブルも頻発しています。安全の確保のためには致し方ないという考えがある一方、「聖地の守護者」としての役割を果たせないまま、一方的に入国を制限する政府のやり方に対する批判とが入り混じる中、現在も入国制限が続いています。

図4は、アジアから北アフリカにかけてのイスラム教徒の分布と、国民に占めるイスラム教徒の割合を示した地図です。最もイスラム教徒が多いインドネシアでは、推定2億2800万人、人口比率の少ないインドでも1億6000万人のイスラム教徒がいます。現在、各国には年間最大20万人程度の巡礼者の受け入れ枠が用意されていますが、国によっては渡航申請を出してから10年以上待たなければならない事態も発生しています。

2016年からサウジアラビア政府は、メッカに入るすべての巡礼者にGPSと個人識別IDを内蔵したブレスレットの着用を義務付けました。混雑状況を常に把握して、将棋倒しなどの危険性がある場所に近づかないように警告を発生し、迷子や急病人の身元確認に役立てようというものです。

歴史上まったく経験したことのない巡礼ラッシュの中で、信者の聖地巡礼への欲求と安全性をどう両立させていくのか、人口や交通手段、外交関係を加味しながら、各国に「巡礼者受け入れ枠」をどう振り分けるかなど、「聖地の守護者」であるサウジアラビア政府としても、頭の痛い問題のようです。

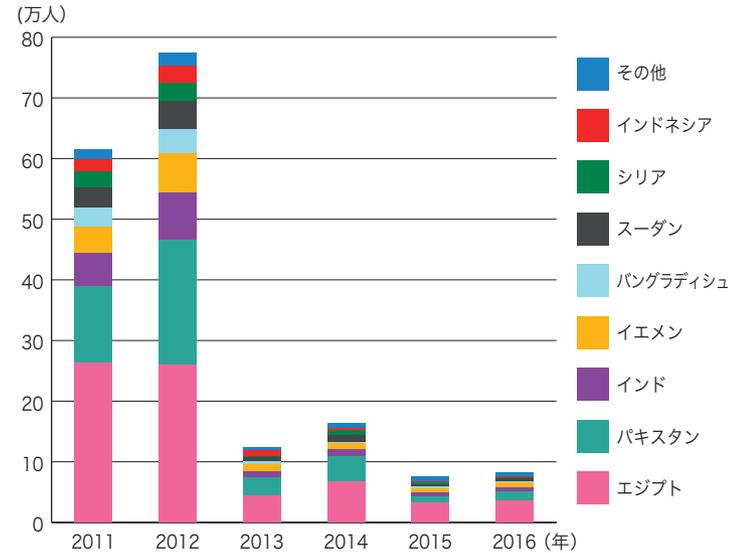


図3 周辺国からのメッカ巡礼者数の推移 (サウジアラビア王国統計庁“Statistics of Hajj”より作成)

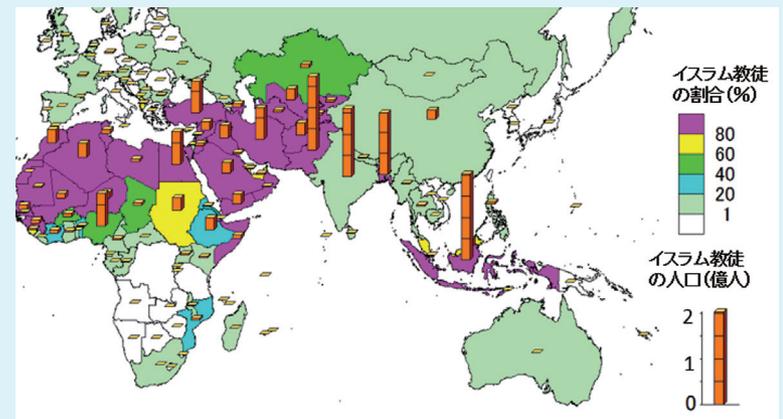


図4 アジア・アフリカ周辺のイスラム教徒の信者数と人口割合 (Pew Research Center (2009) “Interactive Data Table: World Muslim Population by Country”より作成)